

前に機先を制してこっちから初野を巻きこまなくてはいいの。だからよけいな小言の種は作りたくないの」

もえぎがちょっと身がまえる。

「那珂姫、何を考えておいでなのですか？」

「桜大臣家を立て直す、私なりのやり方を聞いてもらおうの」

「どんなやり方ですか？」

那珂姫は口ごもった。

「……もえぎ、少し待ってね。実のところ、このくわだてがうまく行くか、自信はないの。小娘の世迷いごとと笑い飛ばされるかもしれない。だから、もえぎにも初めての話として聞いて、そして判断してもらいたいの……あ」

話題の主だ。重々しい歩き方。でっぷりしていると表現するか御大家にふさわしい貫禄と言うかは人次第。桜大臣家の奥向き筆頭女房は、多忙でもやつれを見せたりしない。那珂姫はずっと、初野だけはこわかった。甘い父よりも、口げんか相手の殿方——明雅や皇太子——よりも。

だが今は、そのこわい初野と対決しなければいけない。

「那珂姫、今日もお元気そうで何よりですね」

「ありがとう、初野」

「ところで、二の宮はいずこへ？」

「遊びに行っているんじゃないかしら」

そう言う那珂姫のうしろから、もえぎが口をはさんだ。

「たぶん、いつもの内緒のお友だちとご一緒ですよ。あい

かわらず楽しそうです。でも、今朝は母様が来るとお知らせしておきましたから、そろそろお戻りになるでしょう。昨日のうちに桜大臣家の様子は私たちからお話ししましたが、二の宮だって母様の口から色々聞きたいはずですよ」

やがて帰ってきた二の宮に、初野は顔をほころぼせる。

「まあ、二の宮ったら、ほんのしばらくお見かけしないだけなのに、また背が伸びたような」

「ね、初野、じじさまは？ 母上は？ お元気？」

「ええ、お二人とも、お変わりないですよ。もう少ししたら、お見舞いにおいでになれるかもしれません」

那珂姫は内心驚いて初野を見る。本当に病気である桜大臣はともかく、病氣と称して出家した桜女御のことを、二の宮にはくわしく話していかないのだ。二の宮は身分の高い皇子らしく、仕える者が困ることを聞いてはいけないとがまんしている。そのいじらしさに甘えている状態だ。出家姿の桜女御を会わせていいものか、決めかねていたから。

だが、それから思い直す。初野が不用意なことを口にするはずはない。初野にはたしかなくろみがあるのだろう。うれしそうに二の宮に、初野は小さな包みをさしだす。

「お土産でございます。桜大臣家の領国から勲いさおが持っていました。山の民が作る細工物で、よく回るそうです」

「あら、独楽だわ。なつかしい」

二の宮の手の中の、きれいにろくろで削られた独楽を那